

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：23501

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13072

研究課題名（和文）幼小教育現場におけるアクティブ・ラーニングの源流と可能性に関する日仏共同研究

研究課題名（英文）Collaborative Japanese-French research on the origins and possibilities of active learning in the field of kindergarten and primary schools education.

研究代表者

瓦林 亜希子（KAWARABAYASHI, Akiko）

都留文科大学・教養学部・准教授

研究者番号：10780249

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼少期から子どもたちの自由な自己表現を教育活動の土台とすることが、現代の教育課題解決に如何に効果的に活用しうるかを、日仏両国で行われている2つの教育実践（生活綴方とフレネ教育）を通して明らかになった。子どもの自己表現を学級の皆で共有するという日常的な活動は、協同的かつ社会構成主義的な行為の経験を深めることになり、子どもたちの多様で広い価値観を養うことの軸となる。こうした各自の持つ価値観（ある子どもの主観）を、他者という複数の主観の中に通すという、間主観的な合意を日々繰り返すことで、答えが決して一つではない探究的な学びを同時に進めていくことに、大きな影響を与えていることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

既に日本では、生活綴方及びフレネ教育に関する研究は多数存在しているが、これら二つの教育方法を関連付け、その実践と思想について詳細に論じた研究は皆無に近い。しかし本研究では、代表者の長年に渡るフランスでの留学・研究経験を生かし、日仏研究者による共同研究というこれまでにない形で、これらの教育実践について分析した。この二つの教育が戦前より訴えてきた、子どもの自己表現を尊重し中心に据える教育の重要性とその先駆性について、それぞれの国の教育制度や背景を絡め比較研究を行えたことは、まさにアクティブ・ラーニングの源流を明らかにし、両国の教育のさらなる発展に寄与する研究を実現することができたと言える。

研究成果の概要（英文）：This research has shown through two educational practices in France and Japan (spelling and frenetics) how effectively using children's free self-expression as a basis for educational activities from an early age can be used to solve contemporary educational problems. The daily activity of sharing children's self-expression with the whole class deepens the experience of cooperative and social constructivist action, and is the axis for the development of children's diverse and broad values. The daily repetition of this intersubjective agreement, in which each child's own values (one child's subjectivity) are passed into the multiple subjectivities of others, was found to have a significant impact on the simultaneous development of inquiry-based learning, for which there is never just one answer.

研究分野：教育学

キーワード：フレネ教育 生活綴方 アクティブ・ラーニング 子ども主体 自己表現 協働的な学び フランス 幼児教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

文科省が2016年8月26日に指導要領等改訂に向けて発表した「審議のまとめ」には、「新しい時代に必要となる資質・能力」(キー・コンピテンシー)を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」とし、学習過程を「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点で見直し改善すると記されている。以前の2014年12月中教審答申では「課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習・指導方法であるアクティブ・ラーニング」と説明していた。しかし今回、「アクティブ・ラーニング」に新たに「視点」が加わり、「狭い意味における授業の方法や技術の改善に留まるものではなく、子供たちの深く対話的で主体的な学びを引き出し、どのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものについて、その問い直しを目指す」と解釈をさらに深めている。このように、学習の方法論ではなく、学びの在り方そのものについての問い直しを目指すための概念と定義されたアクティブ・ラーニングが、指導要領改訂に向けて学校現場でそれがどのように理解され、実際に何をどう変えていくのかについて、自国と他国の先行事例から学ぶことは非常に重要である。

我が国では、20世紀初頭以来、教授中心の授業論から子ども主体の学習論への転換をはかろうとした新教育運動の世界的潮流の中で、私立学校や師範学校附属小学校で新たな実践が数多く生まれていた。それらに影響を受けながら、地方の貧しい公立学校の若い教師たちが、子どもに生活の中で見た・聞いた・感じたことをありのままに自由に書かせ、その作文(当時は綴方)を教材にしてクラスで読みあうことで、個別かつ協働的・対話的な学びを学級で作ろうとしてきたのが生活綴方実践であった。我が国にも、こうした学習観の大転換を試みた先駆的な実践が、既に戦前から存在し、戦後の隆盛期を経て数は減ったものの、現代でも主に小学校の現場において、こうした実践は続けられている。

一方でフランスでも時を同じくして1920年代、ブルジョア階級の子どもが通う私立学校だけでなく、公立学校でも子ども中心の新しい教育を保障すべきと誕生したのがフレネ教育である。以来仏では主に小学校でこの実践は続けられてきたが、2013年、当時のペイヨン教育大臣が掲げた教育改革:「子どもたちが皆が成功できる学力を」のスローガンのもと、キーワードとして注目されたのが「Bienveillance: ビヤンヴェイヤンス」(一人ひとりの子どもを好意を持って受け入れる、との意)という概念である。カナダでの「ケア」としての教育実践から生まれたというこの概念が、フランスではフレネ教育の中で既に長く実践されていたと国からも認められ、仏教育省が主宰する研修会等で多くのフレネ教育研究者が呼ばれて講演を行っており、仏口レーヌ大ゴ准教授もその一人である。幼小の現場においては、この改革下で作成された新教育プログラムが2015年に公表され、既に16年度から実施されている。

そして今日、偶然にも日仏両国において、戦前から存在してきたこの二つの教育実践が目指す「子ども中心の教育方法と理念」が、再び注目されているのはなぜなのだろうか。こうした「古くて新しい」実践の中に、現代が抱える世界的な教育課題(不登校やいじめ問題、学習障害や学習不振の問題)を解決するカギが隠されているのではないだろうか。それらが本研究を支える根本的な「問い」である。さらにこのような実践は、子どもの幼少期、つまりは幼稚園と小学校において徹底的になされることで、それ以降の子どもの健全な成長を支えることができるのではないだろうか。この仮説についても明らかにしていきたいと考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、子どもの自由で多様な言語・表現活動を保障することが、現代の教育課題解決に如何に効果的に活用しうるかを、日本の生活綴方とフランスのフレネ教育の2つの実践及び理念を通して明らかにすることを目的とした。1920年代という同時代に日仏両国で生まれたこれらの教育実践は、子どもの主体的かつ協働的・対話的学びを先駆的に目指したものであり、まさにアクティブ・ラーニングの源流と呼べるものである。フランスは勿論のこと日本においても、これら二つの教育方法を関連付けて詳細に論じた研究は、他に皆無と言って良い。本研究では、代表者の長年に渡るフランスでの留学・研究経験を生かし、日仏研究者による共同研究(仏口レーヌ大学・トゥールーズ大学の教育学研究者との連携)という、これまでにない形で、この二つの教育方法について検討する。日仏両国の幼稚園と小学校で戦前から行なわれている子ども中心の教育実践の分析を通し、今後日本の教育改革においてアクティブ・ラーニングを展開する可能性と意義に関して日仏共同研究という国際的な広い視野から明らかにしたいと考えた。

以上で述べたような日仏の先駆的事例から学びつつ、特にいち早く学習者主体の教育改革を既に行っているフランスの現状について、現地の専門家であるフランス人教育学研究者と共同で研究を進めていくことは、これまでにない研究であり、両国の教育改革に大きく寄与し、さらに新しい発展と展開を促す創造的可能性と独自性を持っていると言える。

### 3. 研究の方法

当初は、以下のような3年間の研究計画と方法を立てていた。

<平成30(2018)年度:日仏教育実践の現場参観と記録化>

初年度の研究では、日本の80年代以降、フレネ教育と生活綴方の両教育実践が今日の日本において置かれている現状を分析し、それらの教育的意義が今新たに見直される可能性について検討する。上記の研究を進めていく具体的な現場としては、1)1980年代からフレネ教育実践を展開する国立お茶の水女子大学附属小学校(特に自由テキストを低学年にて積極的に実践して

いる本田祐吾学級) 2)同じく 1980 年代から埼玉でフレネ教育を土台とした自然教育を実践している私立幼稚園のけやの森幼稚園のクラス、3)戦前より生活教育の実践を積み上げてきた私立和光小学校(特に自由テキストの実践を進めている松本あゆみ学級と山下淳一郎学級) 4)二十年前から生活綴方実践を続けている埼玉の公立小学校の新井郁子学級、5)埼玉大学にてフレネ教育について学んだ後教師となり現場でフレネ教育実践を始めた栃木県日光市の公立小学校の福田奈奈学級、を予定している。さらに、秋以降も日本の教育現場の参観を続ける一方、仏トゥールーズ大学のギャラン教授を日本に招聘し、日本が戦前から如何に学習者主体の先駆的な実践を行ってきたかについて、フランス人研究者の観点からの講演をして頂く。そして年度末にはフランスに赴き、北部ナンシーではロレーヌ大学のゴ准教授との共同研究についての打ち合わせと、ゴ准教授がアドバイザーとして指導に入っている、ナンシーのフレネ教育を実践する幼小の現場訪問、南部ヴァンスではフレネ学校における幼小クラスの実践の参観を行う。

<令和元(2019)年度：日仏教育実践の参観記録の分析と論文化>

二年目は、仏ロレーヌ大学ゴ准教授が所長である LISEC 研究所や、フランスのフレネ教師たちの国内組織 ICEM の中に創設された、世界のフレネ実践を記録し後世に残すことを目的とする研究グループ等と連携を取りながら、日本でのフレネ実践とフランスでのそれとの比較研究を進める。さらに前年度で挙げた 5 つの学校を引き続き見学し、継続的な実践記録を積み重ねていく。同時に、日本のフレネ教育の実践家で以前生活綴方を実践されていた教員たちへのインタビューも行い、両者の関わりや共通点・相違点について深める。同時に、上記のギャラン教授と引き続き連携を取りつつ、現代日本における子どもの自由な表現を尊重する教育実践の事例に関して、所属する仏の日本研究学会：SFEJ にて来年度での学会発表のための原稿の完成を目指す。さらには仏人教育哲学研究者であるコリー LISEC 研究員を日本に招聘し、日仏の幼稚園での自由教育実践と理論についての講演を開催する。

以上の研究成果を生かして、フレネ教育と生活綴方に代表される自由教育の現代的意義とその可能性について、論文執筆に入る。その際、正確かつ生のフランスの情報を取り入れるため、9月と3月の二度のフランスでの学校現場の調査とインタビュー、資料収集を行う。

<令和2(2020)年度：本研究成果の日仏両国の学会やシンポジウムでの発表と学会誌への投稿>

最終年度は、本研究の総まとめの年とする。仏ロレーヌ大学ゴ准教授を日本に招聘し、講演会と研究成果発表会を兼ねた、日仏のアクティブ・ラーニングをめぐる教育改革に関するシンポジウムを日本で開催する。さらに日仏両国の所属学会での、研究成果発表を行う。

#### 4. 研究成果

上記の「3. 研究の方法」で書いた通り、本研究は当初は3年間にわたる日仏共同研究の計画を立てていた。しかし、研究2年目の終わり、2020年2月に日本でも新型コロナウイルスの感染拡大が起こったことから、結果的にその後約4年間にもわたり、つまりは本研究最終年度となった2023年度まで、この世界的なパンデミックの与えた影響は大変大きなものであった。特に本研究は、日仏間の国際共同研究を土台としていたため、特に途中約2年間は国際交流的な研究を実際に行うことは困難であった。最終的に、コロナ禍という前代未聞の状況により例外的な研究延長が認められたこともあり、本研究は当初の3年間の予定を大幅に超え、足掛け6年間の長い研究期間となった。以下、年次ごとに研究の成果について振り返る。

(1)2018年度のフランスでの調査としては、2018年5月に、南仏ラシオタにあるジャン=ジョレス中学校を訪問した。2018年は、フランスの公立中学校・高校の中に初めて設けられたフレネ教育クラスとして、実験的かつ先駆的な実践を試みてきた CLEF が誕生してからちょうど10年の節目であり、ジャン=ジョレス中で卒業生や在校生、その保護者たちや研究者たちも参加し、記念式典とシンポジウムが行われた。この機会に、ラシオタ周辺の主にマルセイユでフレネ教育を実践している幼稚園と小学校の現場の教師たちも複数参加しており、中等教育以前の段階でどのようにフレネ教育が行われているかについて、ビデオを通してではあるが、確認できたことは大変有意義であった。こうした幼児教育・初等教育におけるフレネ教育を土台とした延長線上に、中等教育においてフレネ教育を実現させる意味があるということも、再認識できた。

日本での調査としては、2018年9月に成城幼稚園を見学した。フレネ教育とは違うが、子どもの表現活動を尊重し教育を行っている姿があった。2019年2月には、御茶ノ水女子大学附属小の本田祐吾学級(小1)と、大阪の箕面こどもの森学園小を見学した。本田学級では、「てつがく」というサークル対話を中心とした授業内での子どもたちの協働的学びの中で発表された文章を元に、国語における作文と漢字の学習につなげる実践や、箕面こどもの森小では、算数のグループ学習の様子などを見学した。ともに、それぞれの環境で目の前の子どもたちの生の声を学びに活かす学習の様子がみとれた。

(2)2019年度は2019年4月に、南仏ラ・シオタにある公立学校ジャン=ジョレス中学校とリュミエール高校内のフレネ教育クラスを訪問した。さらに上記中学のフレネクラスの元社会科教師が転任して新たにフレネ教育を実践している、マルセイユ市のロンシャン中学校も見学することができた。ジャン=ジョレス中学では、2018年秋の新学期からフレネクラスの担当教員の多くが入れ替わり、若手の先生も多くなっていったが、どの先生も各教科子どもたちそれぞれの表現や興味・関心を活かした学びを構築しようとして工夫されていた。保護者や卒業生の方からもお話を聞く貴重な機会も得られた。ロンシャン中学校では、話を聞いた校長によると、現在学校をあげてフレネ教育を推進しており、実験的に通知表での点数評価を廃止しコメントのみにするとい

う改革も行なっているという。他の先生方にも フレネ教育の波が波及し、学校全体でフレネ教育の実践を評価し支えている様子が見えた。リュミエール高校では、哲学のクラスを中心に見学を行った。この高校のフレネクラスでは、通常では3年生からの必修科目となっている哲学を、2年生から必修とし長い時間をかけて哲学的・批判的思考を生徒たちに身につけることを目指しているという。哲学担当の先生にもインタビューを行うことができた。

2020年3月には、南仏ヴァンスにあるフレネ学校を見学した。3クラスある各担任の先生が若い方に変われ数年たち、特に幼稚園クラスの先生が瞑想やマッサージの時間を活用して、子どもたちにリラックスと集中力アップを図られていたのは興味深かった。

日本においては、秋と冬に和歌山と南アルプスにある私立きのくに子どもの村学園小中学校を見学することができた。子どもたちが異年齢学級の中で自由にそれぞれの学びを主体的に創り上げている様子や、彼らが教師の役割をする「大人」たちと、協働しながら生活している姿をこの目で確かめられた。

(3)2020年度は、コロナ対策により所属する国内の学会や研究団体の大会は中止かオンライン開催となったことから、オンライン開催の際にはできる限り参加した(地域サークルの研究会等も含め約20回以上)。そのような困難の中で、仏に直接出向くことは難しいため、せめて国内で子ども主体の教育を実践している学校見学をできる範囲でと考えていたが、秋冬になっても叶わなかった。しかし2021年3月に出張で九州に行くことになり、きのくに子どもの村学園の一つである北九州子どもの村小中学校に見学交渉をしたところ、幸運にも許可を頂けた。コロナ禍にある教育現場の中でも学習者主体の教育を何とか保障しようと奮闘する教員の姿と、子どもたちの生き生きと学ぶ様子を直接確かめることができたことは、有意義であった。北九州子どもの村小では、教育学者であるきのくにの創立者にもお会いでき、現代において体験学習を柱とする学校を設立するに至った歴史やその意義についてお話を聞いたことは、貴重な機会となった。

結局、年度末まで海外渡航は不可能な状況であったが、zoom やメールを通して新たな交流も実現できた。共同研究先である仏ロレーヌ大学 LISEC 研究所の先生方と日仏の学校におけるコロナ対応について情報交換をしたり、仏国立東洋言語文化研究所内の「アジアの子ども社会研究グループ」の研究会にオンラインで参加したりなど、海外に直接行かずともコンタクトが取れる手段が広がったことは幸いであった。

(4)2021年度は、南仏にてフレネ教育を実践してきた3人の先生方を日本に招聘し、都留市内の学校での生徒たちとの交流や大学での講演とゼミ等での研究交流、仏で販売されているフレネ教育の小学校用国算の学習教材の購入、共同研究先である仏のロレーヌ大、国立東洋言語文化研究所、トゥールーズ大のいずれかを訪問し、研究者へのインタビューや現地の学校訪問と資料収集、を予定していた。しかしコロナ禍による海外渡航の制限や国際郵便事情の混乱により、実現不可能な状態となった。

そこで海外との研究交流は諦め、国内での学校見学の実現を模索した。コロナ感染状況が緩和した2021年11月に、8月の日本教育学会の大会で大阪市生野区の生野南小学校の独自の実践を知ったことから、同小学校の公開研究会に参加した。生徒の3分の1が児童養護施設から通う厳しい状況という生野南小は、木村幹彦校長が中心となり、教師の側から権威性を排し子どもとの上下関係を水平関係へと転換と、「心を育てる国語科教育」と「ことばで紡ぐ生きる教育」の二つを柱にし学校独自の6年間の連続したカリキュラム「生きる教育」の作成に取り組んだ。人権教育から性教育、市民教育までも総合的に網羅した内容は、子ども主体の学習の保障はもちろんのこと、教師自身も主体的に学びのあり方を改革しようと試みた非常に先駆的な実践であった。また、直接的な海外との研究交流が不可能な中、オンラインでの交流を模索し、この科研費の助成を頂いた上で、2022年2月に仏フレネ学校校長オレリア・ルヴェ先生の特別講演「ヴァンスのフレネ学校の教育理念と現在の実践」を企画し、当日の通訳を担当したところ、50名以上の参加があり好評を得た。2022年3月には、京都の京田辺シュタイナー学校を訪問し、教員へのインタビューと校舎内の見学を行い、子どもの成長段階を最優先に構築された教育内容と環境整備の実態について知ることができた。

(5)2022年度は、2022年10月に行われた仏ロレーヌ大学でのシンポジウムでの発表の機会に、日仏における子どもの自由な表現活動を尊重する教育の歴史と意義について、本研究の総まとめの意味も込めて発表を行うことができた。さらに続く2022年11月には、仏トゥールーズ大学の日本教育研究者：クリスチャン・ギャラン先生を1ヶ月間都留に招聘し、「日仏の比較教育における効果的な受容と伝達について」と題した講演をして頂いた。近代以降の日仏間の比較教育における翻訳が生む語弊と、それを如何に乗り越えて行くかに関して、ご自身のフランス教育省と日本の文科省を通じたお仕事の実験等をもとにお話くださり、大変興味深い内容であった。この講演には、本学の多くの学生・教職員の方々の参加を得られたことは非常にありがたかった。またギャラン先生には、都留滞在の間に、瓦林ゼミへの参加、院生との懇談、教育原理等の他学科授業への参加など、学生との交流も複数回に渡って行って下さった。その際、日仏の教育制度、教員養成 制度の違いや、近來教育成立の歴史の日仏の特徴の違いなど、多くの有意義なお話を

して頂いたことは、私自身の研究にとってはもちろんのこと、学生たちにとっても、非常に貴重な国際交流の機会となり得たと考えている。

加えて、コロナ禍における規制緩和により、以下の学校・学級を訪問できた。生活教育を軸に独自のカリキュラムのもと教育を行っている「私立和光小学校」(世田谷)と「私立和光鶴川小学校」(町田)、作文を中心に子どもの自己表現を尊重する教育を推進する「私立桐朋小学校」(調布)、新教育学者ニールやデューイの思想を元に体験学習を軸とした独自の教育を行う「きのくに子どもの村学園小中学校」(和歌山)、最後に仏トゥールーズ市で1960年代からフレネ教育を含むあらゆる新教育の思想を元に教育実践を行っている「私立ラ・プレリー幼稚園小中学校」以上の日仏で合計5校の学校を訪問することができた。

(6)最終年度である2023年度は本研究の集大成として、フランスにてフレネ教育を1小学校、2中学校・高校(英語)、3高校・大学(哲学)にて、それぞれ長年実践されてきた3人の「フレネ教師」の先生方を都留文科大学に招聘し、講演会や、学生と教員、都留市内の子どもたちとの交流を行うことができた。まずは大学にて講演会を行い、3人それぞれの現場での経験と、なぜフレネ教育を実践するに至ったかについての経緯を語って頂き、90名近い学生や教員の方々が集まって下さった。また、3,4年生の合同ゼミでは、主に来年度から現場の教師となる4年生の学生たちから3人の先生方に、フレネ教育技術の柱である「自由テキスト」実践(子どもたちに自由に文章や絵画等を通して自己表現を促しそれをクラスで共有するもの)に関して、その意義や具体的な実践方法についての本質的な質問が出され、深い意見交換ができた。この合同ゼミには、他学科の学生や学校教育学科の1,2年生や、同学科の英語教育が専門の先生も参加して下さい、多様な議論がなされた。さらに、都留市教育委員会と都留文科大学教職支援センターのご協力により、都留市内と大月市内の小学校、中学校、高校をそれぞれ訪問し、校長先生と3人の先生方との懇談や授業見学をさせて頂いた。おかげで3人の先生方も、日本の教育の現状について深く知ることができたとともに、短い時間とはいえ、児童・生徒たちと英語を交えて交流できたことは、彼らにとっても我々にとっても、とても有意義な活動であった。来年度には、その総括と記録として、3人の先生方の実践記録と、講演原稿を日本語訳したものを小冊子として発行したいと考えている。

また年度末の2024年3月には、コロナ後初めて、久しぶりに南仏のフレネ学校を見学できた。今回は、主に幼稚園クラスをじっくりと見学できたことで、探究活動や自己表現、協働的活動を深めていく過程での、特に最初の幼児期におけるその重要性を再確認するに至った。同時期に、仏トゥールーズ市でフレネ教育を含むあらゆる新教育の思想を元に教育実践を行っている私立ラ・プレリー幼稚園小中学校にも、昨年度に続き二度目の訪問をすることができた。今回の見学では、幼稚園、小学校、中学校の全ての授業の様子を参観した。そのことから分かったことは、幼稚園の時から探究的な学びを進める時間があり、それが小学校、中学校での言語的活動をより発展的に深める原動力となっていたということだった。中学校では、見学した美術の時間においても、探究的に学ぶことが軸となっており、幼少期からの積み重ねによって、そうした深い学習が成り立っているのだと実感した。

(7)以上6年間の研究成果として、本研究においては、上記で報告したように、日仏両国の子ども主体の学びを保障する様々な学級・学校における幼稚園・小学校・中学校・高校で行われている教育に関して、主に子どもの人格形成の土台を作る時期である幼稚園と小学校における実践の観察を行い、その記録を詳細に分析した。このことから明らかになったのは、「幼少期の早い段階から子どもの自由で多様な表現活動を保障することが、のちに小学校高学年、中学校と発達段階が進むにつれ、教科横断的な探究活動をより発展的に進めることができる」ということであった。今回は、研究対象として、特に日本の生活綴方とフランスのフレネ教育の2つの実践及び理念を通して、上記の研究成果が見てとれた。1920年代という同時代に日仏両国で生まれたこれらの教育実践は、子どもの主体的かつ協働的・対話的学びを学級において保障することを先駆的に目指したものであり、アクティブ・ラーニングの源流と呼べるものであると結論付けられた。

このように、幼少期から子どもたちの自由な自己表現を教育活動の土台とすることが、現代の教育課題解決に如何に効果的に活用しうるかを、日仏両国で行われている2つの実践及び理念を通して明らかにすることができた。つまり、子どもの自己表現を学級の皆で共有するという日常的な活動は、協働的かつ社会構成主義的な行いの経験を深めることになり、子どもたちの多様な広い価値観を養うことの軸となる。言い換えれば、様々な個別の価値観(子どもそれぞれの主観)を他者という複数の主観の中に通すという、「間主観的な合意」を日々繰り返すことが、答えが決して一つではない探究的な学びをより深く進めていくことにつながっていくことが分かった。さらに、この二つの実践においては、クラスで起こった様々な問題を、多数決で合理的かつ効率的に解決しようと決してするのではなく、時間をかけて皆が納得できるような民主的に話し合う中で、まさに「間主観的な合意」を子どもたち自身で創り出していく過程も見ることができた。このような活動こそ、現代日本の社会・学校において致命的に欠落している「真に政治的な場」、つまりは「民主的かつ協働的価値を創造できる場」を、幼少時から子どもたちに保障することに、大いに役立つはずである。このような機会の保障は、現代の日本教育が抱える様々な課題、例えばいじめや不登校の問題等を解決できる糸口となりえるだろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 第118号
2. 論文標題 特別講演「フランス・ヴァンスのフレネ学校の教育理念と現在の実践」日本語原稿	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フレネ教育研究会会報	6. 最初と最後の頁 pp.25-31.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 第8集
2. 論文標題 子どもの自由な自己表現を尊重する生活綴方の歴史	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 都留文科大学教職センター 紀要	6. 最初と最後の頁 pp.104-109.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 第33号
2. 論文標題 『スクールライフ：パリの空の下で (La vie scolaire, 2019年) 』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フランス教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 pp.147-148.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 第60回夏の集会号
2. 論文標題 記念講演「映像を添えて振り返る私たちの歩み」を聴いて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フレネ教育研究会通信 10	6. 最初と最後の頁 pp.2-3.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 下巻 - 幼児教育の現代史 -
2. 論文標題 1940年代前後のフランスとフレネ教育運動	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 幼児教育史学会監修/小玉亮子・一見真理子編集『幼児教育史研究の新地平』萌文書林	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 No.860
2. 論文標題 子どもの声に耳を傾け、待つことの大切さ - 「できない」の裏にある「やりたい」を見抜き支援する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生活教育	6. 最初と最後の頁 60-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Henri-Louis GO, Akiko KAWARABAYASHI	4. 巻 2019-2020
2. 論文標題 LA VALEUR DE BIENVEILLANCE EN EDUCATION. UNE COOPERATION FRANCE-JAPON EN "PEDAGOGIE FREINET" 2 (教育における「子どもをありのままに受け入れる」ことの意義 - フレネ教育における日仏間の協働的実践2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 LES VALEURS EN EDUCATION TRANSMISSION, CONSERVATION, NOVATION [LABORATOIRE LISEC -UNIVERSITE DE LORRAINE](仏口レーヌ大学LISEC研究所紀要 - "教育における価値体系：発信と受信、そして革新")	6. 最初と最後の頁 pp.256-274
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 第31号
2. 論文標題 「日仏の高等学校における教育課程改革」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『フランス教育学会紀要』	6. 最初と最後の頁 pp.67-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 第6号 (第59回夏の全国集会号)
2. 論文標題 実践報告「なぜ森のない浦安市で森のようちえんを始めたのか」「ヨーロッパ視察から学んだ実践ー箕面こどもの森学園の変容」について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フレネ教育研究会通信	6. 最初と最後の頁 pp.4-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 5
2. 論文標題 「イェナプランとフレネ教育」記録・感想	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 フレネ教育研究会通信5 (第58回夏の全国集会号)	6. 最初と最後の頁 pp.5-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 No.119
2. 論文標題 “表現者として自分の声を持つ”ことの重要性 猶原先生の発表からー	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『フレネ教育研究会会報』	6. 最初と最後の頁 p.136.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 2024年4月号
2. 論文標題 <書評>子どもが自ら生きたい人生を選び実現できる学校とは？(門脇厚司『大正自由教育が育てた力』岩波書店)」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 雑誌『教育』旬報社	6. 最初と最後の頁 pp.104-106.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KAWARABAYASHI Akiko (瓦林亜希子)	4. 巻 No.56
2. 論文標題 POUR UNE ECRITURE DE LA VIE : LA METHODE SEIKATSU-TSUZURUKATA AU JAPON (「生活の表現のために日本における生活綴方の実践と方法」)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 RECHERCHES EN EDUCATION, EDITION NANTES UNIVERSITE (雑誌『教育研究』ナント大学出版)	6. 最初と最後の頁 近日出版予定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓦林亜希子、岡村保子	4. 巻 2024年2,3月号
2. 論文標題 enjoy!生活教育 学活編 小学5,6年生「学習内容を子どもが決定できる権利を尊重して - 音楽会での演奏曲を子どもたちで提案し選択する」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 雑誌『生活教育』星林社	6. 最初と最後の頁 pp.38-45.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計13件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Akiko KAWARABAYASHI (瓦林亜希子)
2. 発表標題 L' HISTOIRE DE LA METHODE SEIKATSU-TSUZURIKATA(L' ECRITURE DE LA VIE) QUI RESPECTE L' EXPRESSION LIBRE DE SOI DES ENFANTS (子どもの自由な自己表現を尊重する生活綴方の歴史)
3. 学会等名 LES RDV DE L' INSPE(フランス国立教師教育高等研究所主催国際シンポジウム)「学校での生きづらさー問われるべき現実」於 : UNIVERSITE DE LORRAINE(仏ロレーヌ大学) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko KAWARABAYASHI (瓦林亜希子)
2. 発表標題 LA PERMANENCE DU CURANT PEDAGOGIQUE DE "L' ECRITURE DE LA VIE" DANS L' HISTOIRE DE L' EDUCATION JAPONAISE D' APRES- GUERRE (戦後日本の教育における生活綴方教育運動の継承)
3. 学会等名 フランス・トゥールーズ大学外国文学・言語・文化学部日本語学科修士課程ゼミナールにて招聘教員として発表 (全2回) 於 : UNIVERSITE DE TOULOUSE (仏トゥールーズ大学) (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 ヨーロッパにおけるフレネ教育の特異性 - 自然観、カリキュラム、教育運動の観点から -
3. 学会等名 フレネ教育研究会主催 入門講座・応用編
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 「ヨーロッパにおけるフレネ教育の特異性 - 自然観、カリキュラム、教育運動の観点から -」
3. 学会等名 日本フレネ教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 発表：オレリア・ルヴェ（仏ヴァンス・フレネ学校校長）、企画・翻訳・通訳：瓦林亜希子
2. 発表標題 特別講演「フランス・ヴァンスのフレネ学校の教育理念と現在の実践」
3. 学会等名 日本フレネ教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 ヨーロッパにおけるフレネ教育の特異性 - 自然観、カリキュラム、教育運動の観点から
3. 学会等名 日本フレネ教育研究会 主催 フレネ教育入門講座 第3回発展編 I
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 フランス・オランダのフレネ教育の現状
3. 学会等名 日本フレネ教育研究会2019年夏の全国集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 オランダの幼稚園・小学校におけるフレネ教育～学校建築的観点から
3. 学会等名 日本生活教育連盟第71回夏季全国研究集会名古屋大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 フランスの中等教育学校におけるフレネ教育の現状
3. 学会等名 フレネ教育研究会・世田谷サークル(於：下北沢区民集会所[東京都世田谷区])
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 フレネ教育研究会各地域サークルによる実践報告への助言
3. 学会等名 フレネ教育研究会第58回夏の全国集会(於：箕面こどもの森学園[大阪府箕面市])
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Akiko KAWARABAYASHI (瓦林亜希子)
2. 発表標題 HISTOIRE DE L'EDUCATION AU JAPON ET DE LA METHODE SEIKATSU-TSUZURIKATA[EXPRESSION DE LA VIE] (日本における教育と生活綴方の歴史)
3. 学会等名 フランス・ロレーヌ大学アンリ＝ルイ・ゴ准教授ゼミナール「世界の教育史」(フランス・ロレーヌ大学[フランス・ナンシー市])
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KAWARABAYASHI Akiko(瓦林 亜希子)
2. 発表標題 LA PERMANANCE DU COURANT PEDAGOGIQUE DE L' "ECRITURE DE LA VIE " DANS LES ECOLES JAOINAISES APRES-GUERRE (講演：「戦後の教育改革と日本の学校における生活表現を大事にする教育実践の意義」)
3. 学会等名 LES JEUDIS DU JAPON, CYCLE DE CONFERENCES ORGANISE PAR L'INSTITUT FRAN&#199;AIS DE RECHERCHE SUR L'ASIE DE L'EST ANTENNE DE TOULOUSE (仏東アジア研究所トゥールーズ支部主催講演会：日本についての木曜日)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 「日本における子ども中心主義から生まれた教育方法とカリキュラムの理念に関する歴史的研究 作文教育を中心にー 戦前から戦後まで」
3. 学会等名 フランス・トゥールーズ ジャン＝ジョレス大学外国文学・言語・文化学部日本語学科大学院修士課程1年生2年生の講義を計4回担当(招待講演)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小玉亮子、浅野俊和、太田素子、田中友佳子、高田文子、松島のり子、瓦林亜希子、織田望美、首藤美香子、福元真由美、浅井幸子、塩崎美穂、阿部真美子、田中謙、浜田真一、添田久美子、榊瑞希子、小田倉泉、水野恵子、村知稔三、北野幸子、近藤幹生、一見真理子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 萌文書林	5. 総ページ数 389
3. 書名 幼児教育史学会監修/小玉亮子・一見真理子編集『幼児教育史研究の新地平』下巻 ー幼児教育の現代史ー (pp.127-131, 瓦林亜希子「1940年代前後のフランスとフレネ教育運動」)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>国立ロレーヌ大学教育学部LISEC研究所共同研究者紹介HP  <a href="http://www.lisec-recherche.eu/membre/kawarabayashi-akiko">http://www.lisec-recherche.eu/membre/kawarabayashi-akiko</a></p> <p>国立東洋言語文化研究所内アジア教育社会研究グループ (IFRAE)紹介HP  <a href="https://eesao.hypotheses.org/">https://eesao.hypotheses.org/</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ゴ アンリ＝レイ  (GO HENRI LOUIS)	フランス国立ロレーヌ大学・教育学部・准教授	フランスにおけるフレネ教育研究者
研究協力者	プロ フレデリック  (PROT FREDERIQUE)	フランス国立ロレーヌ大学・教育学部・講師	フランスにおけるフレネ教育研究者
研究協力者	ギャラン クリスチャン  (GALAN CHRISTIAN)	フランス国立トゥールーズ大学・外国文学・言語・文化学部 日本語学科・教授	フランスにおける日仏教育の比較研究学者
研究協力者	ドゥ アドリアン  (DOUX ADRIEN)	フランス・ラシオタ市立リュミエール高校・CLEF(フレネ教育 クラス)・英語科教師	フランスの中等教育におけるフレネ教育の実践者
研究協力者	ガスラン ジュリエット  (GASSELIN JULIETTE)	フランス・レンヌ市ブルアラン小学校・校長	フランスの初等教育におけるフレネ教育の実践者

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ゴ ニコラ  (GO NICOLAS)	フランス国立ロレーヌ大学・教育学部・元准教授	フランスにおけるフレネ教育研究者

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 仏フレネ学校校長オレリア・ルヴェ先生特別講演「フランス・ヴァンスのフレネ学校の教育理念と現在の実践」（日本フレネ教育研究会2022年春のオンライン全国集会と共同開催）	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 都留文科大学学校教育学科講演会「フランス公立小学校・中学校・高校でのフレネ教育実践について」（講演者：JULIETTE GASSELIN, ADRIEN DOUX, NICOLAS GO / 2024年1月26日 都留文科大学6201教室）	開催年 2024年～2024年
国際研究集会 都留文科大学学校教育学科講演会「日仏の比較教育における効果的な受容と伝達について」（講演者：フランス・トゥールーズ大学 CHRISTIAN GALAN教授）	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 都留文科大学学校教育学科講演会「子ども主体の教育：フランス・フレネ教育の真髄とは？」（講演者：フランス・ロレーヌ大学HENRI=LOUIS GO准教授/FREDERIQUE PROT講師）	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
フランス	国立ロレーヌ大学教育学部 LISEC研究所	国立東洋言語文化研究所内アジア教育社会研究グループ (IFRAE)	国立トゥールーズ ジャン＝ジョレス大学外国文学・言語・文化学部日本語学科